様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 １１ 日現在

機関番号：３２６７０
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ０４７７１

研究課題名（和文）音楽的経験におけるPerformance Assessmentと学習の拡張

研究課題名（英文）Expansion of Performance Assessment and Learning in Musical Experiences

研究代表者
根津　知佳子（NEZU, Chikako）

日本女子大学・家政学部・教授

研究者番号：４０３３５１１２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、２本の柱から成る。第１の柱は、教員養成段階あるいは保育者養成段階のパフォーマンス評価を開発することである。第２の柱は、音楽的経験において、学習がどのように拡張されるのか、エンゲストロームの活動理論に依拠し、分析・可視化することである。前者に関しては、米国のVALUEプロジェクトに依拠して開発した「対話的事例シナリオ」を基盤として、大学生の学習の深化・拡張について検討した。後者については、複数の音楽的経験の事例について学びの多様性を可視化した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では、これまでの取り組みを基盤とし、乳幼児教育、初等教育、療育現場における音楽的経験に関する評価方法や分析方法を開発・実施した。音楽的経験の相違によって、子ども達の学び（遊び）がどのように拡がり、深まるかを可視化することにより、子どもの生活世界や成長に関する実践者の解釈の幅を拡げることができる。

研究成果の概要（英文）：This study consists of two pillars. The first is the development of performance assessment at the training stage of teachers or childcare workers. The second is the analysis and visualization of how learning is expanded through musical experiences, following the activity theory.For the former, this study investigated how to deepen and expand learning for university students, based on interactive case scenarios developed according to the VALUE (Valid Assessment of Learning in Undergraduate Education) project in the United States. For the latter, this research visualized diversity in learning regarding multiple cases of musical experiences.

研究分野：音楽科教育

キーワード：パフォーマンス評価　音楽的経験　活動理論　ルーブリック

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

近年、学校教育や保育・療育の現場における「音楽療法的アプローチ」への関心が高まっており、免許状更新講習や音楽療法研修会に参加する実践者の数が増加している。これらのニーズに応えるべく、音楽活動における実践知育成を企図した教員養成のための PBL 教育（Problem-Project Based Learning）のコンテンツや Performance Assessment の開発を行ってきた。“音楽的経験”を軸として、これまで開発してきたコンテンツをまとめると、右下のように分類できる。

A-Ⅰ　特別支援教育における音楽療法的活動の開発
A-Ⅱ　地域連携活動におけるアートマネージメント
B-Ⅰ　地域における音楽療法的活動の創出
B-Ⅱ　音楽療法的活動における楽器・音響機器の開発
C　　異文化理解に関する事例シナリオの開発

図１．教員養成型 PBL の類型（根津ら、2004）

一連の研究では、対象者（児童・生徒）を理解し、対象者の学習を拡張させるためのツールとして Performance Assessment を位置づけてきた。並行して、Engeström,Y.の活動理論を分析単位とし、対象者や材の相違が学びの質を変容させ、学び自体がどのように拡張するかを可視化し、開発したコンテンツの有用性を検討してきた。対象者の変容を可視化することにより、音楽科における“最近接領域の捉えなおし”が可能になると考えたからである。

これまで開発した教員養成型 PBL 教育のコンテンツが、保育者養成や療育の研修においても有用であることを検証するためには、乳幼児から幼年期、そして小学校への移行を視野にいれた実践事例の蓄積が喫緊の課題となっていた。

２．研究の目的

本研究は、2 本の柱から成る。第 1 の柱は、教員養成段階あるいは保育者養成段階のパフォーマンス評価を開発することである。第 2 の柱は、音楽的経験において、学習がどのように拡張されるのか、Engeström,Y の活動理論に依拠し、分析・可視化することである。

第 1 の柱　→　対象者の理解の深化 実践者のための Performance Assessment の開発	第 2 の柱　→　対象者の学びの深化 対象者の学びがどのように拡張されるか 活動理論によるモデル化

図 1.　本研究の構造

3 年にわたる研究の最終目標を次のように設定した。

① 養成・研修段階におけるパフォーマンス評価を開発・実施する。
② 乳幼児～小学校低学年（特別支援教育も含む）を対象とした複数のパフォーマンス評価を開発・実施する。
③ 活動理論に依拠したモデル化の有用性について報告する。
④ 異文化における音楽的経験に関するパフォーマンス評価に関する調査・報告を行う。

３．研究の方法

(1)本研究の 2 つの柱について、以下のように推進した。

【第 1 の柱＝実践者のための Performance Assessment の開発】

米国の VALUE（Valid Assessment of Learning Undergraduate Education ）では、教養教育によって形成されるべき能力として 16 領域の力を「知的・実践的スキル」「個人的・社会的責任」「統合的・応用的学習」の 3 つに分類しているが（VALUE、2015）、本研究では、教員養成および保育者養成を対象とするため、「対話」の種類に着目した。

【第 2 の柱＝　対象者の学びがどのように拡張されるか＝活動理論によるモデル化　】

対象者（幼児・児童・生徒）の活動がどのように拡張しているかを可視化するために、活動理論を援用し、分析した。

(2)本研究のキーワードは、以下のように規定した。

① Performance Assessment
何らかの課題や活動を実際に遂行することにより評価するものである。パフォーマンス課題と Rubric（評価基準）の両者の開発を必要とする。

② 音楽的経験
Bruscia（1986）に依拠し、“音楽的経験＝相互人間関係的プロセス”と規定する。

③ 拡張的学習
Engeström,Y.に依拠し、「自らが立っている文脈そのもの創りかえること」「ある場・文脈において発生する葛藤や矛盾を、いかに記述・分析しつつ、いかに新たな活動や組織を創造・再デザインしていくか」ということを重視する。

４．研究成果

(1) 【第 1 の柱＝　実践者のための Performance Assessment の開発】

2017 年度には、ルーブリック（根津、2016）の改善を行い、教員養成の学部段階から大学院を対象とした対話的シナリオ課題の見直しを図った。特に、「なぜ、対話的シナリオが必要なのか」「どのように評価するのか」「音楽に関する対話的シナリオとはどのようなものか」について再考した。

これにより、2018 年度には、「教員養成型 PBL の課題」「事例シナリオの評価方法」「音楽科における対話的事例シナリオ」に関する論文 3 件を発表した。そのうちの「事例シナリオ教育の評価方法」について、大学教育フォーラム（2019.3.22）において、複数の研究者の外部評価を受けることができた。具体的には、高等教育における授業内の対話モデル（図 2）について、学習者同士の対話の多層性を具現化するための代替モデル案を提示することができた。

他にも、小学校・幼稚園・保育園に関する講義科目「音楽実技」に関する対話的シナリオを開発し、具体性（リアリティ）、現実性（アクチュアリティ）、意外性、文化性、発展性、ストーリー性の観点から有用性を検討し学部紀要で報告した（表 1）。

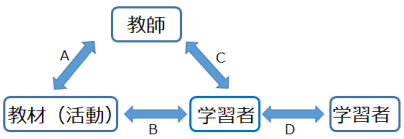

図 2.　授業内の対話（根津、2018）

領域	具体性（リアリティ）	現実性（アクチュアリティ）	意外性	文化性
音楽	1, 2, 3, 7		26, 27	1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 9, 10, 12, 13, 19, 21, 22, 28
児童学	15	8, 14, 15, 17, 23, 24	18	18, 28, 29
食物学				8
住居学	26, 27	26,27		1-3, 8, 9
被服学				1-3, 8
家政経済学	4, 5, 8, 10, 11, 16, 17	4, 5, 11, 16, 17, 20, 25	17, 18	10, 12

表 1.　シナリオの教材性

2019 年度には、幼稚園免許および保育士資格取得希望学生を対象にし、米国の VALUE プロジェクトに依拠して開発した「対話的事例シナリオ」を用い、学びの深化・拡張について検討した。このことから、小学校における音楽科教育の材として開発したシナリオが、幼稚園・保育園の表現領域でも有用であることを検証した。

(2) 【第 2 の柱＝　対象者の学びがどのように拡張されるか＝活動理論によるモデル化】

2017 年度には、幼児・児童・生徒を対象としたパフォーマンス課題について「情動調律」をキーワードとしてまとめた。

活動理論による分析については、幼児・児童の音楽的経験（歌唱）について、活動理論研究会において、楽曲『待ちぼうけ』に焦点を当てた研究を発表し（2018.3.18）、Engeström,Y.理論における鍵概念である「内的矛盾」の概念を確認した。また、幼児期の母子支援に関する 10 年間のデータを再考察し、音楽的場の構造の変容を可視化し、大学院紀要で報告した（図 3）。

図 3.　幼児期の母子支援における場の変容

2018 年度には、幼児・児童の音楽的経験のうち、引き続き歌唱に焦点を当て活動理論研究会で報告した（2018.　9.22）。『かえるの合唱』『ドレミの歌』『待ちぼうけ』等の歌唱教材を介した学習の拡張と深化を可視化するためのモデル図を開発し、材の時間的・空間的拡がりを可視化した（図 4,5）。『かえるの合唱』については、日本感性工学会感性哲学部会（2019.3.9）で報告した。

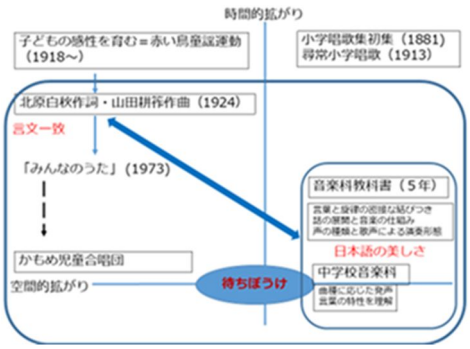

図 4. 材の時間的・空間的拡がり

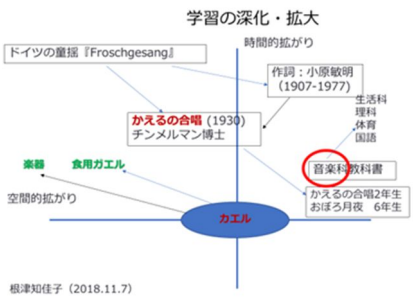

図 5.　学習の深化・拡大

2019 年度には、音楽的経験のうち、歌唱についてのまとめとして、『待ちぼうけ』を材とした「音楽科教育における学び」と「課外活動における学び」の比較を行った（図 6,7）。その結果、「多声的な学びを支えるのは、異音的な学びである」という段階性が明らかになり、学会誌に投稿した。

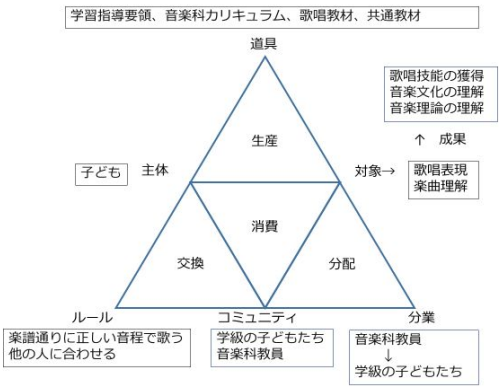

図 6. 音楽科における学び

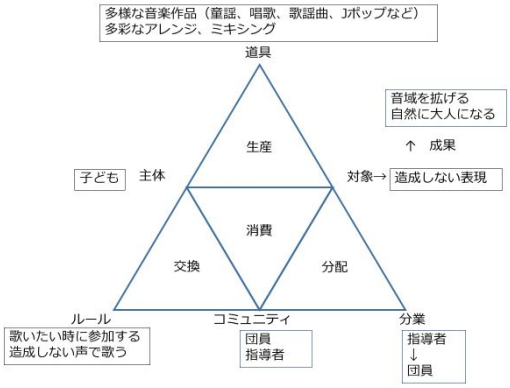

図 7.課外活動における学び

また、幼児期の合奏支援における音楽的経験の比較、同一歌詞／異作曲作品 による音楽的経験の相違について活動理論を用いて可視化し、対象者理解のアプローチ方法を提示した（図 8,9）。

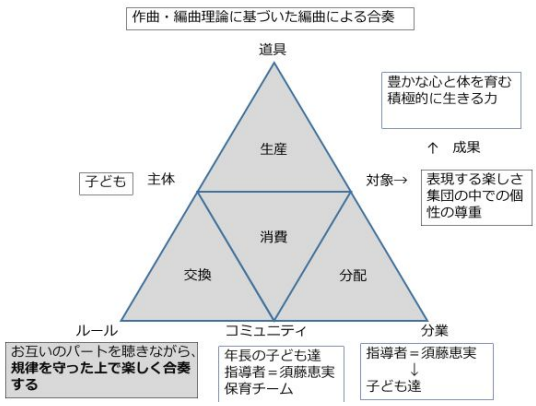

図 8. A 園における音楽的経験

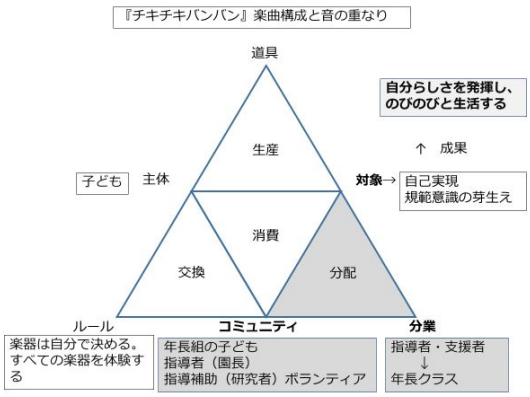

図 9. B 園における音楽的経験

以上、前述した最終目標①～④について、すべて目標に達することができた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計12件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　9件）

１．著者名 根津知佳子・川見夕貴・日下瑶子	４．巻 第26号
２．論文標題 鑑賞活動におけるパフォーマンス評価の開発	５．発行年 2020年
３．雑誌名 日本女子大学大学院家政学研究科・人間生活学研究科紀要	６．最初と最後の頁 235-242
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 根津知佳子・川見夕貴・高橋順子・井上千本	４．巻 第67号
２．論文標題 幼年期の音楽的経験に関する研究～合奏支援を中心に～	５．発行年 2020年
３．雑誌名 日本女子大学家政学部紀要	６．最初と最後の頁 7-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 川上健太郎・根津知佳子	４．巻 第67号
２．論文標題 「音楽実技」における”子どものために”作曲された楽曲導入の可能性	５．発行年 2020年
３．雑誌名 日本女子大学家政学部紀要	６．最初と最後の頁 25-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 川見夕貴・根津知佳子・和田朝美	４．巻 第67号
２．論文標題 舞台空間における音楽表現の保障に関する研究	５．発行年 2020年
３．雑誌名 日本女子大学家政学部紀要	６．最初と最後の頁 33-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 根津知佳子	４．巻 第4号
２．論文標題 ”声を出すこと”による学び	５．発行年 2019年
３．雑誌名 活動理論研究	６．最初と最後の頁 29－38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 根津知佳子	４．巻 Vol.49 No.1
２．論文標題 境界　そして　越境	５．発行年 2018年
３．雑誌名 『日本芸術療法学会誌』	６．最初と最後の頁 85-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 小田郁枝・根津知佳子・水谷稚佳子・入江薫子・山崎洋子	４．巻 第66号
２．論文標題 『音楽実技』に関するシナリオ教材開発	５．発行年 2019年
３．雑誌名 『日本女子大学家政学部紀要』	６．最初と最後の頁 53-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 根津知佳子・松本金矢	４．巻 第47巻
２．論文標題 幼児のための楽器開発	５．発行年 2019年
３．雑誌名 音楽心理学音楽療法研究年報	６．最初と最後の頁 47-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 根津知佳子	4．巻 第4号
2．論文標題 ”声を出すこと”による学び	5．発行年 2019年
3．雑誌名 活動理論研究	6．最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 根津知佳子	4．巻 第65号
2．論文標題 情動調律に着目したパフォーマンス評価の意義	5．発行年 2018年
3．雑誌名 日本女子大学家政学部紀要	6．最初と最後の頁 11-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 根津知佳子	4．巻 第24巻
2．論文標題 音楽的経験を軸とした幼児期の母子支援に関する研究	5．発行年 2018年
3．雑誌名 日本女子大学大学院家政学研究科人間社会学研究科紀要	6．最初と最後の頁 189-196
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 根津知佳子	4．巻 第17巻1号
2．論文標題 書評：阪上正巳・岡崎香奈編著『ケースに学ぶ音楽療法Ⅰ・Ⅱ巻』（	5．発行年 2017年
3．雑誌名 日本音楽療法学会誌	6．最初と最後の頁 56-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 根津知佳子・吉澤一弥・和田直人・角藤比呂志
2．発表標題 ウィリアムズ症候群の音楽表現
3．学会等名 第19回日本音楽療法学会学術大会【自主シンポジウム】
4．発表年 2019年

1．発表者名 根津知佳子・吉澤一弥
2．発表標題 ウィリアムズ症候群の視空間認知とパフォーマンス
3．学会等名 第51回日本芸術療法学会
4．発表年 2019年

1．発表者名 根津知佳子
2．発表標題 『星めぐりのうた』における音楽的経験～宮澤賢治と丸山亜季の楽曲比較を中心に～
3．学会等名 活動理論学会秋季研究会
4．発表年 2019年

1．発表者名 根津知佳子
2．発表標題 "声を出すこと"に内在する学び
3．学会等名 活動理論学会
4．発表年 2018年

１．発表者名 根津知佳子
２．発表標題 音風景と感性
３．学会等名 日本感性工学会第14回春季研究会感性哲学部会
４．発表年 2019年

１．発表者名 根津知佳子
２．発表標題 音楽的経験を基盤とした家族支援―ウィリアムズ症候群の音楽キャンプを通して―
３．学会等名 活動理論学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 根津知佳子
２．発表標題 音楽活動における内的矛盾～童謡『待ちぼうけ』の表現をめぐって～
３．学会等名 活動理論研究会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計3件

１．著者名 加藤富美子・有本真紀・今川恭子他　日本音楽教育学会設立50周年記念出版編集委員会編著／根津知佳子（共著）	４．発行年 2019年
２．出版社 株式会社音楽之友社	５．総ページ数 第3章2-1を担当pp.148-149
３．書名 『音楽教育研究ハンドブック』第3章音楽教育研究のフィールドと実際2-1 「障害児の多様な音楽表現」	

１．著者名 谷田貝公昭監修／大沢裕・藤田久美編著／根津知佳子（共著）	４．発行年 2020年
２．出版社 一藝社	５．総ページ数 第13章を担当pp.103-112
３．書名 『子どもの理解と援助』第13章「子ども理解を深める実践と省察」	

１．著者名 山田康彦・森脇健夫・根津知佳子・赤木和重他５名	４．発行年 2018年
２．出版社 三恵社	５．総ページ数 pp.17-22 pp.48-59 pp.152-160 pp.203-204を担当
３．書名 PBL事例シナリオ教育で教師を育てる　教育的事象の深い理解をめざした対話的教育方法	

〔産業財産権〕

〔その他〕

音楽の森　Sound & Silence
http://www.chikakotsukioka.com

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考